

劇を取り入れた英語授業の試みについての一考察

—効果と課題を探る—

丹羽 佐紀〔鹿児島大学教育学部（英語教育）〕

Drama as a method of teaching English at junior high schools: Effects and problems

NIWA Saki

キーワード：英語劇、物語、文学作品、模擬授業、文化

はじめに

—近年の中学校英語教科書の現状から—

ここ数年、筆者が担当する「英語科指導法Ⅱ（英米文学）」の授業において、劇を取り入れた英語の模擬授業を実践している。ここで「劇」という言葉が意味しているのは、日常的な挨拶や簡単な会話といった、一過性の断片的な場面で繰り返される会話劇ではなく、いわゆる名作として長く読まれ、また語り継がれてきた文学作品などに基づく、ストーリー性を持った劇ということである。このような試みを、指導法の授業にあえて取り入れようとしたのにはいくつか理由が挙げられるが、大きくは以下の2つの理由による。

まず、近年の中学校英語教科書をひも解いてみると、『学習指導要領』（平成20年3月）の外国語目標に掲げられている、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」（105）という趣旨に則った授業展開の必要性から、即効的な実用会話が中心となっている。⁽¹⁾そしてそれに伴い、児童文学を含む物語作品を出典とした内容のものが極力減っているのに、危機感を抱いたということがある。『学習指導要領』の目標には、「言語や文化に対する理解を深め」（105）とも明記されている。様々な国の様々な暮らし、物の考え方、風土、風習、歴史が多様に盛り込まれた各国の名作に触れることは、この目標を達成させるに十分であり、かつ豊かな感性を養うために必要な作業でもあると考える筆者にとって、一時的な会話表現の練習や流行りのメディア教材のみでこの目標が達成されるのか、大いに疑問を感じるところである。

何冊か手元に入手できる中学校英語教科書を、

無作為にはあるが参照してみた。かなり古いものではあるが、例えば1972年版*New Prince English Course 2*（開隆堂）にはラフカディオ・ハーン（Lafcadio Heam, 1850-1904）の“A Mujina”（Unit 7: Lesson 18）（96）、1973年版*New Prince English Course 3*ではシャーウッド・アンダーソン（Sherwood Anderson, 1876-1941）の“Where Did I Have the Ache?”（52）やL. N. トルストイ（Lev Nikolayevich Tolstoy, 1828-1910）の“How Much Land Does a Man Need?”（72）（いずれもアダプテーション）が載せられている。時代が下って1995年版*Everyday English 2*（中教出版）では、『魔女の宅急便』をもとにした“Kiki’s Delivery Service”（Story Time II）（82）やマーク・トゥエイン（Mark Twain, 1835-1910）の“Tom Sawyer Paints the Fence”（Further Reading）（91）が掲載されているが、原典についての説明の記載は特にない。最後の扉ページには、英国のナーサリー・ライム（nursery rhyme）が載っている。*Everyday English 3*（1995）では、手塚治虫（1928-1989）（“Tezuka Osamu”（Lesson 6））（52）や杉原千畝（1900-1986）（Story Time II）（65）の逸話など、歴史を扱ったものが目立つが、最後の扉ページにはクリスティーナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830-1894）の“Boats Sail on the River”という詩が載せられている。手塚治虫については、2007年版の*One World English Course 2*（教育出版）でも“Reading for Pleasure”（105）のコーナーで取り上げられている。これが2004年版の*Sunshine English Course 2*になると、正規の課目としてではなく最後のページに付録のReadingとして映画*The Sound of Music*のストーリー（86）、また2000年版*Sunshine English Course 3*では、や

はり付録としてCarpenters(99)やWham!(100)の曲が載せられているのみである。さらに最近のものとしては、2012年版 *New Horizon English Course 2* で映画E.T.が "My Favorite Movie"(Unit 7) (74)として取り上げられるなど、文学作品ではなくどちらかと言えば映像ものを出典としたテーマが多く取り上げられている。このように、教科書においてストーリー性に重点を置いた作品の占める割合が年を経るごとに著しく減っているのは、コミュニケーション能力が、物語をじっくり味わい、その作品が書かれた背景に思いを巡らすという授業課程では育成されない、という思い込みがあるからではないだろうか。その点では、2012年版 *New Horizon English Course 3* の名作鑑賞のコーナー(134)で、"Life and Nature"としてレオ・バスカーリア(Leo F. Buscaqlia, 1924-1998)の『葉っぱのフレディ』(*The Fall of Freddie the Leaf*, 1982)が取り上げられているのは、やや注目に値する。

さて、指導法の授業に劇を取り入れようとしたもうひとつの理由は、英語という、全身を使って習得する言語の授業だからこそ、劇の特性を活かせるのではないかと考えたということがある。劇は従来、文学のみならず「音楽・絵画・彫刻・建築・舞踏などを任意に包含している」「一種の総合芸術」と捉えられてきたように、多種多様な形での表現方法が求められる。⁽²⁾ もちろん、本格的な劇の上演ならともかく、授業の一部として取り入れるには限界もあり、また生徒が理解しやすい表現を使うなど工夫が必要である。しかしそれを考慮に入れても、自分を何らかの形で表現し、それを他者に向けて発信するという劇の特質は、文学作品そのものに触れることになるだけでなく、『学習指導要領』が掲げる、コミュニケーションへの積極的態度の育成にもつながる可能性を持つのではないかと考える。

教える側の立場にたつて

一教師による英語劇に期待できる効果一

「英語科指導法Ⅱ」の授業において、特に筆者が意識的に試みているのは、教える立場にある教師が物語劇を演じるという形で、模擬授業を実践

することである。それは、英語で劇を演じることは、学ぶ側の生徒にとって有効であると同様、教師にとっても様々な点で効果的な方法だと考えるからである。そこで本論では、教師の側が英語の物語劇を演じることによって授業を進めていくことの効果と課題を、過去5年間ほどの授業の状況を振り返りつつ分析してみたい。

このような実践授業を始めるにあたって、具体的には、次のような効果が期待できると筆者は予測した。

- (1) 劇や授業の準備段階で、その作品が書かれた国の歴史的背景や、作者についての幅広い知識が得られ、それをもとに生徒たちに様々な文化・風習を紹介することができる。事前にこれらの予備知識を持って授業をするのと、持たないで授業をするのとでは、授業の質が大きく違ってくる。
- (2) ストーリーを持つひとつのまとまった文学作品でありながら、その中にナレーターの文語的表現と、登場人物の会話表現を同時に入れられる。
- (3) 体全体を使って登場人物の特徴などを表現することから、言葉だけでなく身ぶり手ぶりも交えた表現の実践が期待できる。
- (4) 対面する相手だけでなく、観客(生徒)を意識した発話となるので、目線の在り方を工夫することにもなり、また発声練習の効果も期待できる。
- (5) 観客(生徒)の前で登場人物の役になりきることによって、日本人に見受けられがちな羞恥心という壁を、多少なりとも乗り越える訓練ができる。また、教員採用試験で模擬授業をする時に、先生の役と生徒の役を「演じる」ための実践練習になる。
- (6) 各グループで、それぞれリーダーを中心に、小道具、台本、授業プリントなどを一から創り上げていくため、役割分担の決定、作業の段取り、打ち合わせなどが必要になり、その過程で協調性が養われる。

以上のような予測をもとに、実際に学生を籤引きで3つないしは4つのグループに分け、グループごとに、劇を取り入れた授業を創り上げるよう指

示していった。条件として、ある程度英語の基本的文型を教わった段階の、中学2年生もしくは3年生を対象とした授業とすること、「今日の表現」など文法の要点を決め、劇の中にその表現を取り入れて授業とのつながりを持たせること、劇に関してはグループ全員参加であること、台詞は暗記して台本を見ないこと、生徒へのハンドアウトには作品解説のコラムを設けること、などを出したが、あとは学生の自由な発想に任せた。

具体的事例と効果について

本章では、前述した授業の具体的な効果の予測に対して、実際に模擬授業をした後で得られた結果について分析する。

(1)については、中学2、3年生に理解できる程度の平易な英語表現を使う工夫が求められたことから、多少なりとも学生たちは台本を作るのに苦勞するようである。そのためか、自然な流れとして、選ぶ作品はグリムやアンデルセンなどのよく知られた物語となる。しかしながら、台本を作るにあたって改めて原典を確かめることにより、新たな発見に驚くというような光景がしばしば見られた。また、日本の昔話を題材に選び、自国の文化を再発見するという経験をするグループも多い。

前者の例として、例えば『ブレーメンの音楽隊』では、動物たちが物語の最後でブレーメンにたどり着いてハッピーエンドになると思っている学生が多かった。そこから、なぜタイトルにブレーメンとあるのか、また、登場する動物が実際の人間社会でおかれていた状況など、様々な視点から物語を捉え直すきっかけができた。⁽³⁾ 『白雪姫』を取り上げたグループも比較的多いが、グリム初版本では、白雪姫を殺そうと企むのは、継母ではなく実の母親であることを知って驚いた学生も少なからずいる。⁽⁴⁾ そこから、ヨーロッパにおける女性に対する社会的概念の歴史と、父親不在の物語構成が意味するところについて考えを巡らすと同時に、内容によっては残酷と受け取れるものもあるため、中学生に見せる劇としてはどのバージョンの物語を採用するか慎重な判断が必要ではないかといった意見も出た。また、『狼と7

ひきの子ヤギ』『白雪姫と7人の小人』『3匹の子ブタ』など、繰り返して出てくる3と7の数字が、西洋でいかに神秘性を持って捉えられてきたか、調べ直すことにもなった。

異文化を理解するだけでなく、自国の文化を発信していくという視点から、日本に古くから伝わる物語を劇の題材として取り上げるグループもあった。その際、意外と物語についての思い込みがあったり、また知らなかったことも多く、結果的には、外国の物語と同様、自国に伝わる物語についても「発信する」よりむしろ改めて「知る」ことの方が多いという傾向がみられた。具体的には、例えば『桃太郎』伝説や『浦島太郎』伝説が、一つのストーリーや特定の地域に限られないこと、それぞれの物語の起源や登場人物の象徴的意味にも諸説あることを知らなかった学生にとっては、準備をすること自体が勉強になったようである。⁽⁵⁾ ちなみに『浦島太郎』については、1995年版の*Everyday English 2*において、"Urashima Taro: A Play" (Lesson 10) (73) として劇の形で取り上げられているが、現代風に内容をアレンジしたパロディもので、環境汚染がテーマとなっている。また2007年版の*One World English Course 2*でも、"Urashima Taro Returns" (32) というタイトルで、竜宮城から故郷に戻った浦島太郎が、都市化で変わり果てた故郷の公害やマスコミ攻勢に閉口して、玉手箱から出てきた亀と一緒に再び竜宮城へ戻るというあらすじになっている。いずれの教科書においても、物語そのものの由来等については特に触れられていないが、題材としては比較的取り上げやすい作品なのかもしれない。

このような事例からだけでも、物語劇を取り入れることで、生徒はもちろん教える立場にある教師の方も、多岐にわたる文化的背景を英語の表現を通じて学ぶことができると実感する。このような効果を、日常的な生活英語の場面ばかりのユニットにおいて実現させることは、とうてい望めないだろう。

(2)について、学生たちは、劇の台本も自分たちの工夫により作成することを求められる。単純に物語のあらすじに沿って台詞を考えるだけでなく、時間配分、各登場人物の台詞の量の公平

性、文法の難易度などを考慮しなくてはならない。その中で、表現の豊かさによって生徒を惹きつけるといった工夫も必要となる。したがって、これらの準備をする段階で、授業をする立場にある教師の基礎的表現力も養われる。また、劇が持つ柔軟性として、ナレーターの文語的な語り表現と、登場人物たちの口語的な会話表現を織り交ぜることができ、聞く側の観客（生徒）に、その語りの違いを感覚的に理解させることが可能である。

(3) は、劇を使った授業において最も効果が期待できる要素であろう。それぞれの登場人物は、ただ立って台詞を言うだけでなく、多少なりとも何らかの表情を観客（生徒）に対して示すことが求められる。実際、各グループの模擬授業が終わった時点で行った発表評価のアンケートにおいては、身ぶり手ぶりの表現が多少オーバーかと思われにくい人物の方が、観る者の記憶に残りやすく、また注目を浴びた。⁽⁶⁾ 逆に、台本を棒読みしているだけのよう、抑揚のない発話をする人物に対しては、「何の役をしている人なのかよくわからなかった」という意見が多く聞かれた。注目すべきことは、身ぶり手ぶりの表現が豊かであった登場人物の方が、その台詞の英文についても、観客（生徒）の記憶に残りやすいということである。ということは、授業の中で生徒に覚えさせたい表現については、教師自身が、教科書の例文をただ読みあげるだけでなく、自分の表現として表情豊かに話すことが効果的と言える。

(4) は (3) とも関連するが、劇の立ち稽古をする時点で、初めて「立ち位置」の重要性に気がつく学生が多い。実際の劇の場面でも、登場人物たちがそれぞれ舞台のどの位置に立って台詞を述べるかは演出によって大きく異なり、その違いによって、同じ台詞でも意味合いが全く異なってくる場合がある。このことはすなわち、劇に対する観客の印象を良くも悪くも変えることを意味する。したがって、授業との関連で言えば、劇を演じる時のみならず授業をする時にも、観客（生徒）の側からどう見えるか、観客（生徒）を意識した位置に自分が立っているか、特定の観客（生徒）のみに見えるようになっていないか、などを

配慮する必要がある。教室という限られた空間の中で、自由に動くことには限界があるが、可能な限りにおいて、できるだけ生徒の視点に立って自分の位置を確認することが大切である。

(5) については、特に日本人の特性としてしばしば指摘される「恥」の意識を克服することが求められるであろう。各グループ発表後の評価アンケートにおいて、自分のグループの反省、また他のグループについての感想の中でも、「恥ずかしがってうまく演じられなかった」という意見が、毎回多い。互いの顔を見合わせてくすくす笑ったり、下を向いて観客（生徒）と視線を合わせないようにしたり、といった態度がよく見られる。役に「なりきる」ことは難しいかもしれないし個人差もあるが、回数を重ねることである程度は克服できるのではないか。そのために取り組むべき初歩的な方法として、*CNN English Express* 2012年9月号で北野宏明氏も指摘しているように、まず「腹式呼吸をして大きな声を出す」(8-9) 訓練をすることが必要だと考える。⁽⁷⁾ 自分が演じていることを恥ずかしがると声も小さくなり、観客（生徒）には台詞が聞き取りにくくなる。その結果、覚えてほしい表現なども生徒の記憶に残りにくくなると言えよう。

(6) の協調性は、この授業における作業全体を通じて学生に求められたことである。グループの編成については、特定の友人同士で固まらないよう籤引きでメンバーを決め、また、1学期を大きく前半と後半に分けてグループ替えをした。できるだけ様々な人と接しながら、協力して作業を進めていけるようにとの配慮からである。どの作業も、一人では困難なものばかりであったが、協力という点に関しては、特に大きな問題はなく、学生たちは柔軟に対応して作業が出来ていたように思う。

授業の中で英語劇に期待できる機能 —様々なパターンと問題点について—

「英語科指導法Ⅱ」では、授業の中に英語劇を取り入れる形で学生たちがそれぞれ工夫して進めていくため、授業全体の流れの中でどこに劇を持ってくるかは、各グループによって異なった。

また、それに応じて、授業全体の中で劇がどのような機能を果たすかも、各グループによって様々であった。

まず、授業のいちばん始めに劇を持ってくるグループがある。この場合、劇は授業への誘いや生徒への動機づけといった、導入的な機能を持つ。すなわち、教師は始めに生徒を劇で惹きつけて「何が始まるんだろう？」と期待させておいて、物語の世界に入り込ませ、その中でどんな英語の台詞が聞こえてくるか耳を澄ませるように促す。生徒は通常の授業と少し違った始まり方に意外性を感じ、比較的集中して劇を観ることができる。問題点としては、登場人物の話している英語が理解できなかつたり聞き取れないと、たちまち興味を失ってしまうことが挙げられる。模擬授業の評価アンケートでも、最初に劇を観ることで、ポイントとなる表現が何なのかわからないので、やや注意力が散漫になってしまう旨の感想が挙げられた。このような反省から、学期の後半、2回目の模擬授業では、授業のいちばん最初に劇を持ってくるグループはなくなった。

工夫としていちばん多かったのは、「今日の表現」の指摘や新出単語の練習などをある程度済ませて、生徒にその時間覚えるべき表現を把握させた上で、劇を見せるやり方である。ここでは、劇は表現の確認や使い方の例示のための反復的機能を果たす。教師は、「今習った表現が、劇のどの場面で話されているか」「劇の中で誰がこの表現を使っているか」に気をつけながら劇を観るよう、生徒に促す。そして、劇を観たあとで復習、練習問題などのワークシート作業をさせる。この方法であれば、生徒は特に登場人物の台詞に注意して耳を傾け、リスニングに重点を置いて劇を観るため、物語の展開についても比較的理解しやすい。また、劇を観たすぐ後で練習問題を解くことにより、自分の表現として理解できているかどうか確認することが可能である。問題点としては、台詞の聞き取りの方に集中しようとするので、劇そのものや登場人物の動きの面白さを味わうことには、やや意識が向かなくなってしまう傾向がある。

少数ではあるが、「今日の表現」の説明や表現

練習、練習問題などのワークシート作業を全て終えたあとで、授業のいちばん最後に劇を見せるグループもあった。劇では、その日に習った表現が登場人物の台詞の中に出てくることはもちろん、そこから少し応用させたやや難しい表現、長いセンテンスも盛り込まれている。劇は、授業で習ったことからさらに新しい表現までを想起させる、発展的な機能を持つ。生徒は、練習問題での表現確認を終えた後で劇を観賞するため、台詞の内容と物語の展開をほぼ理解できる。そのため、劇を全体として楽しむこともできる。問題点は、授業時間の終わりに近く、また生徒によっては練習問題を解いた時点で授業が終わったと感じ、あとは余興のつもりで劇を観るため、やはり注意力がやや散漫になる可能性が無きにしもあらず、ということである。

以上述べたように、劇を授業のどの時点で取り入れるかによって、劇が果たす機能はそれぞれ異なってくるが、学生は、自分たちの伝えたい「今日の表現」を効果的に生徒に覚えさせるため、それなりに様々な工夫をこらすことが出来ていた。

模擬授業を通して見えてきた課題

これまで、劇を授業に取り入れることによって得られる、様々な効果について分析してきた。グループによっては、非常に工夫がなされ、また準備がしっかり出来ている模擬授業も見受けられ、そのまま実際に中学校などで披露できれば、と思うこともしばしばであった。実際には、いろいろと考慮しなければならない種々の問題もあり、単純に実現にこぎつけることは容易ではないと思われるが、本章では、授業の形態そのものについて見えてきた課題に絞って、幾つか挙げてみたい。

まず、何といても人数の問題が挙げられる。教師の側が劇を演じるという想定のため、一人の教師が授業時間内でこのプロセスをこなすことはもちろん無理で、当然ながら複数の教師の協力が求められる。したがって、通常の英語の授業よりは、むしろ「総合的な学習の時間」や「特別活動」、もしくはオプショナルな時間を利用しての実践の方が、より現実的と言えよう。しかしながら逆に、複数の教師が劇を演じ、普段とは違う意

外な面を見せることによって、生徒の興味を惹きつけるといった効果は期待できるかもしれない。

次に、「英語科指導法Ⅱ」の授業では、受講生全体の人数から判断して、1グループにつき11人から13人程度の人数に割り振るため、この人数でバランスよく配役ができる内容の物語作品に選択肢が限られる。必然的に、毎学期同じような作品が選ばれるという傾向がある。登場人物が多い、あるいは少ない作品も含めて、より様々な作品を生徒に紹介できるようにするためにはどのような工夫が必要か、今後考えていくべき問題と思われる。

さらに、「今日の表現」で、生徒が1時間の授業時間に覚えられる文法の量はどのくらいか、ということが反省の際にしばしば問題となった。物語の展開によって、どうしても様々な英語表現を使わなくてはならない場合があるが、例えば未来形なら未来形、受動態なら受動態というように、できるだけ覚えるべき表現を最小限に設定した上で、授業も劇も進めていく方が、生徒の記憶にも残りやすいと考える学生が大半であった。そのためには、劇の台詞にかなりの工夫が必要であり、表現も限られてくる。したがって、劇で物語の醍醐味が十分示せなかった場合には、後で作品について別途コメントをするなど、補足的な対応も考慮しなくてはならないだろう。

授業全体を振り返って

これまで述べてきたように、物語作品を劇として取り入れた英語の模擬授業の試みは、教師になって生徒に英語を教えるという根本的な目的を見据えながらも、それを達成するまでの過程において、様々な別の要素も同時に必要であることを学生自らが学んだという点で、それなりに有意義だったと言える。別の要素とは、例えば積極性、表現力であったり、また協調性ということもあるが、やはり他国や自国の名作を自ら味わい、その文化的背景を知り、ひとつの形にして発信するという一連の経験が、将来、生徒に対して授業をする上でも大切であることを、学生は学んだのではないかと考える。さらに、そのような経験を自ら積極的に「楽しむ」ことこそが、将来、英語に対

する生徒のモチベーションをも高めることにつながるのである。

註)

- (1) 『中学校学習指導要領』(平成20年3月告示)第9部外国語の「第1 目標」として掲げられている文言は以下の通りである。「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」(105)
- (2) 『文学要語辞典』(研究社、1978) 88-89. "drama" の項目を参照。
- (3) もともと日本の学校教育の場において、グリムのメルヒェンがどのように扱われ、また読まれてきたかについては、中山淳子氏が主として明治期の状況を中心に詳しく解説している(中山淳子著『グリムのメルヒェンと明治期教育学—童話・児童文学の原点—』(臨川書店、2009年))。『ブレーメンの音楽隊』についても、同著「資料 グリム十四話(第六版)—グリムの原話、および明治の日本語訳との対比—」の中で「十 ブレーメンのお抱え音楽隊」として取り上げている(349-62)。また、グリム童話全般についてのテーマ解釈や理解の方法については、梅内幸信著『童話を読み解く—ホフマンの創作童話とグリム兄弟の民俗童話—』(同学社、2001年)などに詳しい。
- (4) 吉原高志・吉原素子編訳『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』(白水社、1998年) 172-88. 板倉敏之・佐藤茂樹共編『もうひとりのグリム—グリム兄弟以前のドイツ・メルヘン—』(北星堂書店、1998年)では、解題の中で、『白雪姫』についてはグリム以前から様々な形の物語が流布していたこと、継母が通例なのか、グリム初版のように実母なのかについては、「文献学的検証が必要」であるとの指摘がなされている(308)。
- (5) 『桃太郎』伝説に関する解説としては、専門的な著書も数多くあるが、一般向けとしては鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史 I 絵入

本から画帖・絵ばなしまで』(ミネルヴァ書房、2001年) 27-33、207-25、アン・ヘリング著『江戸児童図書へのいざない』(くもん出版、1988年) 149-95などが挙げられる。

- (6) 模擬授業では、各グループが発表した後に、それぞれの発表について全員で評価をした。評価内容項目としては、「劇について」(1. ストーリー展開、2. 演技・動き・声、3. 台詞の妥当性)「授業について」(1. 要点の的確さ、2. ワーク・板書の工夫、3. 声や態度)「ハンドアウトについて」(1. 見やすさ、2. 内容の正確さ)の合計8項目を設け、それぞれについてA、B、Cで評価をすることとした。その他に、気がついたことなど自由にコメントを書くようにした。これらは全て記名式による。自分のグループの発表についても、反省という視点から同様に評価をした。
- (7) *CNN English Express* 9月号(2012)(朝日出版社)の巻頭スペシャルインタビューにおいて、ソニーコンピュータサイエンス研究所の北野宏明氏は、国際会議などにおける日本人の発表について、質疑応答への対応、声の大きさなどについて問題がある旨を指摘している(7-9)。

参照した教科書

Everyday English 1 (中教出版、1995)
Everyday English 2 (中教出版、1995)
Everyday English 3 (中教出版、1995)
New Horizon English Course 1 (東京書籍、2012)
New Horizon English Course 2 (東京書籍、2012)
New Horizon English Course 3 (東京書籍、2012)
New Prince English Course 2 (開隆堂、1972)
New Prince English Course 3 (開隆堂、1973)
One World English Course 1 (教育出版、2007)
One World English Course 2 (教育出版、2007)
One World English Course 3 (教育出版、2007)
Sunshine English Course 1 (開隆堂、1994)
Sunshine English Course 2 (開隆堂、2004)
Sunshine English Course 3 (開隆堂、2000)

主要参考文献

CNN English Express (朝日出版社) 2012年9月号
アン・ヘリング『江戸児童図書へのいざない』(くもん出版) 1988年
板倉敏之・佐藤茂樹共編『もう一人のグリムーグリム兄弟以前のドイツ・メルヘン』(北星堂書店) 1998年
梅内幸信『童話を読み解くーホフマンの創作童話とグリム兄弟の民俗童話ー』(同学社) 2001年
中山淳子『グリムのメルヘンと明治期教育学ー童話・児童文学の原点ー』(臨川書店) 2009年
鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史 I 絵入本から画帖・絵ばなしまで』(ミネルヴァ書房) 2001年
ピーター・ハント編、さくまゆみこ・福本由美子・こだまともこ訳『子どもの本の歴史』(柏書房) 2001年
樋口晶彦・島谷浩編著『21世紀の英語科教育』(開隆堂) 2007年
福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典』(研究社) 1978年
文部科学省『中学校学習指導要領』平成20年3月告示(東山書房)
文部科学省『中学校学習指導要領解説 外国語編』平成20年9月(開隆堂)
文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』平成20年8月(東洋館)
吉原高志・吉原素子編訳『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』(白水社) 1998年